

アフリカの人々と名付け 44

西アフリカの人々と誕生曜日に因む名前

小馬 徹

クワメ・ンクルマ

西アフリカのガーナは、第2次世界大戦後に陸続と独立したアフリカ諸国の魁となった事で、アフリカ史に鮮やかに名を刻している。この国の南部の住人の大部分は数百万の人口を誇る国内最大の民族アカン人であるが、アフリカ独立運動の理論家として、またガーナ建国の父として知られるクワメ・ンクルマもこの民族の出身だった。

彼は、自著で、半生の回顧を次のような言葉で始めている。「私の誕生について、ただ一つ確かだと思われるのは、私がエンジマのエンクロフル村に、九月なかばのある土曜日の昼ごろ生まれたということだけなのである」[『わが祖国への自伝』、1961]。

この例に見るように、アカンの人々は、本名よりもむしろ誕生曜日に因む命名によってお互いを知っているのである。今回は、まずアカンの誕生曜日に因む名前をとりあげてみよう。

アカンの名付け

アカン人の命名については、アカン人であるアジャバ・クワベナによるかなり詳しい報告がある。ここでは、本名の命名儀礼と曜日に因む名前に関する部分だけを引用する。

赤ん坊が生まれると、近所の人々がその家をこぞって訪問する。そして、「生まれいでたなら我らと共にあれ。ただ美しさを見せるだけで去ることなかれ」と祝福の言葉を掛ける。本当の名前は、生後一週間目に、盛大で麗々しい命名儀礼によって授けられる。一例を挙げれば、「真実の歴史」を意味する、ノコレ・アバコセムというような名前である。この名前によって、例えば、赤ん坊の父親が母親との結婚に至るま

でに困難な道のりを迎った事、赤ん坊がまだ母親の胎内にいる時には生きては生まれてこないだろうと言われていた事、さらには、赤ん坊が正直な男の子に育って欲しいという家族の願いなどが表現されるという[「金菜(ガーナ)における子どもの名付け、『月刊アフリカ』30(10)、1990]。

しかし、正式の命名に先立って、誕生と同時に、「子供には精神を表す名とか運命の名というものが、生まれた日の曜日から従って自動的につけられる」のである[前掲書]。

アカンの誕生曜日名

赤ん坊の母親は、「苦痛と生と死をくぐり抜けたとされ不浄の者とされるので、産後一週間は自室に」こもって日を送る。したがって、赤ん坊にとっても、その母親にとっても命名儀礼がお披露目となる[前掲書]。ここで留意すべきは、命名儀礼の日が誕生日のちょうど一週間後であり、誕生日と同じ曜日に当たる事だ。

では、赤ん坊にはどのような誕生曜日名が与えられるのだろうか。高根務は、次のような便利な一覧表をあげている[「ガーナーアカンの人々の命名法」、松本脩作・大岩川嫩(編)『第三世界の姓名』、1994]。

曜 日	男子の名	女子の名
月曜日	コジョ	アジョア
火曜日	クワベナ	アベナー
水曜日	クワク	アクア
木曜日	ヤオ	ヤー
金曜日	コフィ	アフィア
土曜日	クワメ	アマ
日曜日	クワシ	アコスア

パウレの誕生曜日名

ところで、アカンと極めてよく似た誕生曜日に因む命名が、ガーナの西の隣国コートジボワールの最大民族集団であるパウレの人々の間にも見られる。原口武彦は文献によりながら、やはり次の簡便な一覧表を掲げている[「コートジボワール——部族で異なる名前の文化」、前掲書]。

曜 日	男子の名	女子の名
月曜日	クワシ	アキン
火曜日	クアディオ	アジョア
水曜日	コナン	アメナ
木曜日	クワク	アフ
金曜日	ヤオ	アヤ
土曜日	コフィ	アフエ
日曜日	クワメ	アモワン

先に高根が挙げたアカンの一覧表と対照すると、全く同じ名前やよく似た名前が出ている。両者の類似性は二つの表から既に明らかだが、パウレとアカンでは誕生日名が一日ずれていることも同時に読み取れるだろう。

表記の仕方と読者の楽しみ

このように、専門の人類学者以外の人々による報告が、時として人類学的研究の穴を埋めてくれる場合があり、助けられる。また、一覧表による表記ではあっても、通文化的な比較には便利であろう。ただし、原音表記も和音表記についての解説も省かれている事が珍しくない。こうした場合には、混乱や誤解の危険が伴っていることを予見しておかなければならない。

ここでも、一つの例を挙げておこう。アジャバ・クワベナは、先の論稿の中で、クワシ（月曜日生まれの男子）、クワベナ（火曜日生まれの男子）、アクア（水曜日生まれの女子）という誕生曜日名を挙げている。ところが、彼はそれと同時に「クァジョォ・ンクルマ（Kwadwo Nkurumah）」という人物を登場させていて、

「Kwadwoは月曜日生まれの男性名」という解説を加えている。

一方高根は、月曜日に生まれたアカンの男性の誕生日名をコジョとしている。ただ、このコジョがKwadwoであるだろう事は、クワベナの論稿を媒介としてはじめて推定できる。そしてコジョがKwadwoであれば、それが原口の挙げたパウレのクアディオに対応することがわかる。

やや本論から逸れただろう。だが、こうした資料批判は学問上必要であるばかりでなく、一般読者が想像力の翼を正しく羽ばたかせる上でも大切なことなのだ。書き手には、こうした点の心遣いをお願いしたいと思う。

アカンの募金合戦

とはいえ、高根の報告は、アカンの誕生曜日名が人々の日常生活と実際にどのような繋がりを持っているかもよく伝えていて精彩があり、誠に興味深いものがある。誕生曜日名は、事あるごとに生活の隅々に顔を出すという。

ガーナでは町のそここでちょっとした募金集会在が頻繁にあり、賑やかな太鼓と歌の演奏の中、誕生曜日名ごとのグループに分かれて募金額を競い合う。人々は軽快にステップを踏んでは会場中央の籠に小銭を投じて行く。高根がポカーンとしているとガーナの人々がせき立てる。「『自分の生まれた曜日なんか知らないよ』などというものなら、こいつはカネを惜しんでケチなやつだ、ということにもなりかねない」。やがて、曜日ごとの募金額が声高に告げられ、逐一歓呼をもって迎えらる。そして最高額を募金した曜日名同名者のグループは、また音楽に合わせて踊り出すのだ[高根、前掲書]。

ここでは、誕生曜日名は単なるラベルではない。日常の暮らしの中で、人、名前、曜日が深く響き交わしている。クワベナが誕生曜日名を赤ん坊の「精神を表す名とか運名の名」と呼ぶのは、恐らくこの謂いだらう。西アフリカ各地の運命観については、人類学の報告も多い。

（こんま とおる 神奈川大学 社会人類学）